

2010年12月31日 発行

市史だより

F u k u o k a

12

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Autumn/Winter 2010

TAKE FREE



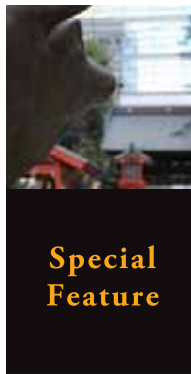
特集

天神

「住む町」から「集う街」へ

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」 ● 連載コラム「福岡市史への歩み」

部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）



現在は福岡市の繁華街として交通の要・流行の発信地となっていて天神ですが、意外にもその賑わいは新しい姿のようです。今回は天神がどのような歴史をたどって、今の賑わいを見せるようになったのかを追ってみましょう。

● 水鏡神社と「天神」

延喜元(九〇二年)、右大臣の菅原道真が大宰権帥に左遷されました。しかも単に都の政治から遠ざけるだけではなく、大宰府でも政務を執らせないと徹しい措置でした。二年後、道真は配所で没しましたが、その後朝廷で起った災いは道真の怨霊の仕業と恐れられました。本来天神は特定の神を指す言葉ではありませんでしたが、道真に対する畏怖や信仰の広まりとともに、天満大自在天神・火雷神・渡唐(宋)天神などさまざまな形で道真を指すようになり、大宰府の安楽寺(天満宮安楽寺、今の太宰府天満宮)と京都の北野天満宮を中心に信仰が広まりました。また天神は学問の神としても信仰を集めるようになります。寛和(一九八六)年の菅丞相が廟に賽する願文(『本朝文粹』)では、道真を「文道の祖、詩境の主」と述べており、官人・僧侶などの間では、早くから天神が学問の神と捉えられていく様子

がうかがえます。不遇な晩年を過ごした道真でしたが、今も天神として信仰を集め、その足跡をさまざまな形で各地に伝えていきます。福岡市でも各地に道真の伝説が残っており、今もいくつかの天満宮が地域で大切にされています。福岡市の繁華街、天神にも水鏡神社が鎮座しています(明治通りを挟んでアクロス福岡の北側)。この水鏡神社は慶長十七(一六一二年)、初代福岡藩主黒田長政によって現在の地に遷されたものと伝えられ、その少し後の慶安(寛文期(一六四八〜七三年)に描かれたと考えられる『福岡城下屋敷図全』(福岡県立図書館蔵)には、確かに今の場所に「天満宮」と記されています。この場所は博多・中洲と福岡をつなぐ重要な橋(現在の西中島橋)の出入り口にあたります。そのためか、延宝二(一六七四年)、秋の祭礼の折に奉納された『水鏡天満宮縁起』では「橋口天満宮」と記され、また元禄十六(一七〇三年)の『天満宮御神田寄進状』の宛名も「橋口天神」とされています(ともに水鏡神社蔵/なお、水鏡神社はほかにも建立の由来から容見天神・四十四川天神とも称されます)。神社の入口も元来は橋に向かって東側にあったようです。「天神」の地名は、この水鏡神社が鎮座することに由来するといわれています。

『福岡城下屋敷図全』では、水鏡神社のそば

に「天神ノ町」と記されており、遅くとも十七世紀後半頃には、水鏡神社一帯を天神町と呼ぶようになっていたようです。

● 堀端の高級住宅街

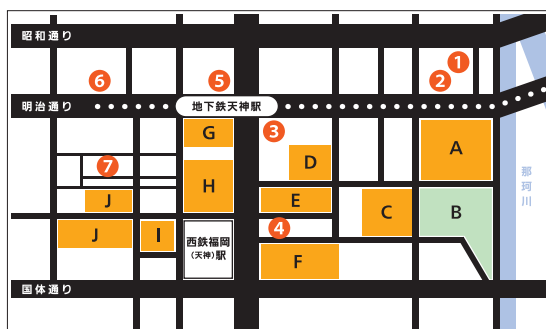
天正(一五七三〜九二年)頃、現在の天神中心部にはいくらかの田畠があったようです。しかし福岡城が築かれ、城下町の整備が行われると一変して、多くの上級家臣たちが居住することになりました。『宝永中第簿』(九州大学蔵/一七二〇年頃)には天神町に居住する家臣として二一名が記されており、石高が一〇〇〇石以上の人が多く見られます。また広さについても記されており、水鏡神社が約五〇メートル四方となっているのに対して、家臣の屋敷地にはそれを超えるものも多くあり、中には神社の約二倍の広さを持つ屋敷地もありました。

整備された町の南側には、那珂川につながる堀が作られ、肥前堀(佐賀堀)と呼ばれました。由来は『筑前国続風土記』や『福岡県地理全誌』に佐賀藩の鍋島直茂が、人夫を多く派遣し、助成をしたことによるとあります。肥前堀については、現在までに四回の発掘調査が行われています。

福岡信用金庫本店ビルが建設される前に行われた昭和六十三(一九八八)年の発掘調査

周辺マップ

- ① 赤煉瓦文化館 ② 水鏡神社 ③ 福岡ビル ④ 福岡信用金庫ビル(天神ツインビル)
- ⑤ 天神ビル ⑥ 福岡証券取引所 ⑦ 新天町
- A アクロス福岡 / B 天神中央公園 / C 福岡市役所 / D 天神ビブレ / E イムズ / F 大丸 / G 福岡パルコ / H ソラリアステージ / I ソラリア西鉄ホテル / J 岩田屋本店





3



1



2

1 「天満宮」の左下に「天神ノ町」と見える。まわりには家臣の屋敷地が広がっていることが分かる【『福岡城下屋敷図全』より／福岡県立図書館蔵】

2 肥前堀から出土した文房具類【福岡市埋蔵文化財センター蔵】

3 享保元(1716)年の造像銘を持つ木造渡唐天神立像【水鏡神社蔵、福岡市博物館寄託／福岡県指定文化財】

査では、堀の底が、わたしたちが歩いている歩道より五メートルも下の位置で確認されました。また、北側には河川敷のような段が作られていて、段の幅は一〇メートルあまりと、意外と広いことがわかりました。この段からは堀の護岸のための杭も見つかっています。

さて、肥前堀は第一三回九州沖縄八県連合共進会(物産展のようなもの)を開催する(明治四十三(一九一〇)年)ため、埋め立てられました。発掘調査では、堀を埋めた時に投入されたのか、当時の器や文房具などが見つかりました。明治といえは、そう大昔でもないのですが、流行の移ろいが激しい現在では、当時の道具がどこか懐かしく感じられます。

● 県庁の街「天神」

共進会の開催と肥前堀の埋め立ては、県庁を中心とする天神の拡大と発展にとって大きな転機となりました。もともと天神には、明治九年に県庁が旧福岡城から移転(現・アクロス福岡・天神中央公園所在地、昭和六十一年に東公園へ移転)してきたのをはじめとして、県会議事堂、福岡区役所(のち福岡市役所)などの官庁が建ちならぶ街となっていました。今も西中洲に建つ旧福岡県公会堂貴賓館は明治四十三年の建設で、往事の姿を今に伝えています。肥前堀の埋め立て地には福岡警察署が移転するなど天神の規模はますます拡大していきました。

県庁の周辺には官公庁の他にも多くの施

「城下町・天神ノ町」から「繁華街・天神」へと変わった都市の貌。

天神「住む町」から「集う街」へ

特集

設が建つようになります。代表的なのは水鏡神社に隣接して一際目立つ赤煉瓦の建物、福岡市文学館（赤煉瓦文化館）です。これは日本生命保険株式会社九州支店として、明治四十二年に竣工したものです。この場所が明治十年に第十七国立銀行（福岡銀行の前身）が建てられた地でもあります。さらに那珂川沿いには福岡日日新聞社（西日本新聞の前身）の社屋が建てられ（明治四十年）、情報の発信地ともなりました。その後、博多米穀株式取引所（昭和九年、現・福岡証券取引所／昭和二十四年）の候補地として博多部を制して天神に移転が決まるなど、現在に至るまで銀行や金融関連企業の本店、支店が多く存在する金融の街ともなっています。

天神にはこのような官庁街、ビジネス街が形成される余地がありました。廃藩置県によって事実上失業してしまった武士たちの中には稼ぎを求めて、あるいは度重なる土族反乱による戦火を避ける理由で福岡を離れる者が多く、城下町は閑散としていたことが当時の史料に語られています。天神には福岡を去った旧家臣たちの邸宅、すなわち時代の変革によって生じた遊休地が多くあったことが考えられます。さらに埋め立てによって拡大する天神は、土族出身の実業家たちにとっては活動の拠点となりま

ひとくちコラム

天神壊滅の日?!

昭和三十一年（一九五六年）年、天神は壊滅的な被害を受けました。東宝株式会社が製作した特撮映画「空の大怪獣ラドン」の中での話です。

ラドンは全長五〇メートル、体重一五〇〇〇トンの、翼竜に似た翼を持つ怪鳥です。阿蘇の地底で孵化したラドンは、超音速で飛行しながら北上し、佐世保の街を、次いで福岡を襲いました。博多湾岸から天神上空にさしかかったラドンは、岩田屋の屋上に着地します。

そのシーンでは天神交差点付近の精巧なミニチュアが映されており、当時は高層の建造物は多くなく、岩田屋が街のシンボルとして際だった存在感を放っていることがわかります。その東隣には木造の西鉄商店街（西鉄街）があり、ミニチュアで再現された看板が当時の店の並びを伝えていきます。また岩田屋の北隣にはまだ天神ビルが建っておらず、中層の東邦電力ビルが映されています。

ラドンは岩田屋に続いて西鉄福岡駅を蹴散らしながら、当時できたばかりの福岡スポーツセンター（現在のソリアプラザ付近）に着地します。ラドンの羽ばたきはセンターの屋根を紙切れのように吹き飛ばし、陸上自衛隊の応戦むなしく、天神は炎に包まれました。

ラドンに破壊されたのちは、高度経済成長期に入り、天神の街並みも刻々と変わっていきました。特集記事でも触れた通り、続々と百貨店が建設され、繁華街としても天神は着実に発展していきます。そしてきたる平成三（一九九一）年、福岡の街はふたたび怪獣に襲撃されます。「ゴジラvsキングギドラ」に登場する三つ首の竜、キングギド

ラです。

平成に入った天神の景観は、ラドンの頃とはすっかり様変わりしており、渡辺通り沿いには移転後の博多大丸福岡天神店、天神イムズ、天神愛眼ビルなどが映されています。キングギドラの吐き出す閃光で天神イムズは大破し、次いで中洲の街が襲われます。

福岡のシーンは短いですが、この五〇年の間にどれほど天神が様変わりしたのか、「空の大怪獣ラドン」と比べて鑑賞すると、違った発見があるかもしれません。



▲ 絵葉書「昭和20年代の天神町交差点」より【福岡市博物館蔵】

した。藩時代には上級家臣たちの邸宅が並ぶ住宅街であった天神ですが、近代になると平岡浩太郎、松本健次郎、伊藤伝右衛門といった筑豊の炭坑主たちがそれらの邸宅を買い取って豪邸を構えるようになりました（伊藤伝右衛門の「赤銅御殿」は有名です）。彼らの存在によっていつそう天神はビジネスの中心地として栄えるようになったと考えられます。

● 商売の街「天神」

今日の天神は商業施設が立ち並ぶショッピング街として、県内はもとより九州各県からも人を集める街となっています。

百貨店は大正年間に作られるようになり、天神では昭和四年に松屋百貨店、同十一年に岩田屋百貨店が開業しました。ことに岩田屋は、九州鉄道福岡駅（現・西鉄福岡〈天神〉駅）と接続し、急行電車の乗降客で賑わいました。しかし太平洋戦争中には、天神もまた福岡大空襲による被災を免れることができず、一部の建物こそ残りましたが、大部分が灰燼と化しました。戦争が終わると天神ではかつての賑わいを取り戻す努力が始まりました。昭和二十一年に新天町が専門店街として落成し、また昭和三十年代にかけて、天神には大型ビルが相次いで建設されます。昭和三十二年には天神証券ビル、同三十七年には福岡ビル、昭和五十年には博多大丸福岡天神店が建ちました。福岡ビルの南

側にあった西鉄商店街や因幡町商店街も昭和五十年代に天神コア、天神第一名店ビル（天神ビブレ）といったビルに変貌しました。

西鉄天神駅は昭和三十六年に高架化していましたが、平成九年にソラリアターミナルビルの完成で現在の姿になり、福岡三越、西鉄天神バスセンター、ソラリアステージと続き、福岡パルコ開業によって、天神の顔の一つとなっています。紙幅の都合ですべてをあげることができませんが、これら多くのビルと商店が、渡辺通りを軸とした商売の街・天神を構成し、多くの人々で賑わう九州屈指の繁華街を作り上げているのです。



4



5

4 水鏡神社への入口は創建当初東側のみだったが、後年北側（橋口町側）に裏口が作られた。今ある入口は明治20年に作られたもの。【『筑前名所図会』より／福岡市博物館蔵】

5 建設当時の姿を今に残す赤煉瓦文化館。

かつて西新町には七つも映画館があった



■ 昭和50年代の西新商店街【写真提供：樋口善朗氏】

フランスで最初の映画（シネマトグラフ）が上映されて二年後の明治三十（一八九七）年には早くも聖福寺境内にあった教楽社で福岡初の活動写真が上映され、大正二（一九一三）年には東中洲に最初の常設映画館の世界館が開館した。その後も開館が相次ぎ映画は市民の娯楽として大いに賑わった。しかし昭和二十（一九四五）年の大空襲で都心の映画館は全滅。戦後の福岡の映画界は西新の聚楽座などわずかに生き残った周辺の映画館から再スタートした。昭和三十年代の映画全盛期には映画館は市内に大小あわせて七十数館あり、西新町には七館あった。

いまの新今川橋西側の英進館西新本館には東洋映劇（のち第二聚楽）、その西新一丁目交差点から南に入った聚楽通りのマンシヨンのメゾン西新のところには通りの名にもなった聚楽座（のち西新東映、てあとる西新）、私のかすかな記憶では二階は畳敷きで、東映時代劇をよく見た。そのすぐ南の高田ビルに西新松竹（のち西新文化）、二番館の文化でプレスリーと加山雄三のシリーズはほとんど見た。それからオレンジ通りのてんぐ屋西新ビルは西新中央日活（のち西新アカデミー）、西新中央商店街のあっぱれ食堂前には新聚楽、脇山口交差点のドン・キホーテの一角には第二東映（のち光映劇）、中西商店街のニシザワには西新東宝があった。昭和三十三年、全国の映画館入場者数が約一億二〇〇〇万人という記録をつかった年に東京タワーが完成。テレビ時代を迎え映画館は次々に消え、西新アカデミーのボケモン上映を最後に平成十一年九月十五日に西新町の映画館の灯が消えた。

歴・史・万・華・鏡

テキスト・田鍋隆男

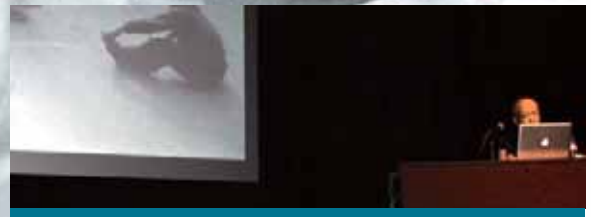
● 『新修 福岡市史』刊行記念講演会を開催しました ●



10月9日午後1時半から、早良区藤崎の早良市民センターホールで『新修 福岡市史』刊行記念講演会が開催されました。今年9月1日に刊行が開始された『新修 福岡市史』の第1回配本を記念して行われた催しです。今回、講師としてお招きしたのは、九州歴史資料館館長の西谷正先生と、写真家の井上一先生のお二方。かたや東アジア諸地域の比較考古学的研究の第一人者、かたや福岡を拠点に活躍する商業写真家。一見まったく異なるジャンルのお二人ですが、福岡の歴史にいろいろな角度から光をあてていく『新修 福岡市史』らしく、私たちが生きる拠点とする福岡の街が、どのような歴史的な深みもちつつ今ここに存在するのか、それぞれの視点からわかりやすくお話しいただきました。



西谷先生には、「中世博多の対外交流—韓国・新安沖発見沈没船をめぐって—」と題して、韓国の新安沖で発見された沈没船を軸に、東アジア世界と深くつながりながら繁栄していた中世博多の貿易実態に鋭く迫るご講演をいただきました。特に、新安沖沈没船は京都・東福寺の造営料船であったという定説に対し、発見された木簡からみて、この貿易船は博多に居を構える中国人たちの活動の一環であったと理解され、東福寺はあくまで彼らの信仰的な寄進対象にすぎなかったのではないかと、注目すべき見解が披露されました。



後半は、福岡市史編集委員会委員長である有馬学九州大学名誉教授による解説に続いて、井上一先生による「思い出の街、福岡—井上孝治が撮った昭和—」。スクリーンには、井上先生の父・孝治さんが昭和三十年代に撮り続けた街角の風景が次々と映し出され、高度経済成長で私たちの暮らしのしくみが大きく変わる直前の福岡がよみがえりました。新天町で氷柱を舐める少年、ブカブカのズックを輪ゴムで留めて遊ぶ少女、漢を垂らしながら道路を三輪車で走り回る子どもたち。独特の構図で時代を捉えた写真に、みなさんすっかり魅了された様子でした。

◆ 『新修 福岡市史』を販売しています

福岡市では、新世紀における本市発展の指針とするため、また貴重な歴史資料の継承を目指して、平成16年度より『新修 福岡市史』を編んでいます。これから平成35年度までに、通史編、資料編、特別編あわせて全35巻を順次刊行していく予定です。

その記念すべき第1回配本として、「資料編 中世1 市内所在文書」「特別編 福の民—暮らしのなかに技がある—」の2冊を、一般に販売しています。ぜひお早めにお買い求めください。

お問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室
福岡市早良区百道浜三丁目1-1 / 電話：092-845-5245



左 ● 資料編 中世1 市内所在文書【A5判 上製本 1350頁】
右 ● 特別編 福の民—暮らしのなかに技がある—【A4判 330頁】

考 古

流通の要であるお金「銭」にはたくさんさんの情報がこめられています。中でも、銭に鑄出された文字がわかると、それが、いつ、どこで作られた銭であるのかを特定する有力な手がかりとなるのです。この情報は、銭そのものの流通や、出土した遺構の時代を導き出すヒントとなり、非常に重要です。ところが、発掘調査で見つかる「銭」は、表面だけでなく内面もサビに侵されたものが多く、文字をすぐに読むことができません。さて考古学者は、このサビに覆われた「銭」から、どのようにして情報を引き出ししているのでしょうか。それは、まさに地道な手作業と科学の融合。

平成二十三年刊行の『資料編考古3』では、サビた銭の解説について、コラムで紹介しています。

古 代

筑前・筑後に関わる史料の収集を続けています。主立った史料はすでに活字化されていますが、早くに公刊された活字のなかには、現在の研究からみると校訂が行き届いていなかったり、新たに良質な写本が発見されたりしているものもあります。それらは改めて原本や写真帳で確認しておく必要があり、所蔵先の関東・関西までしばしば足を運んでいます。すでに活字化されている史料であっても、校訂の精度を高め広く公開することも自治体史の重要な役割と捉え、『資料編古代』の編集のための調査を続けています。

中 世

平成二十六年刊行予定の『資料編中世2』に収録する史料を集める作業が始まっています。その第一段階として、これまでに全国各地で刊行されている数多くの刊本史料集の中から、福岡市の中世に関する史料を抜き出すという、地道で根気が必要な作業を行っています。今のところ、史料所在地の北限は、東北の会津地方(現・福島県)で、当地の地誌『新編会津風土記』などに収録されている、原田氏(室町戦国時代に怡土・志摩郡を拠点に活動した領主)の古文書写の中に含まれている史料です。今後の作業の進展により、これまで知られていない関係史料が掘り起こされることを期待しつつ、作業を進めているところです。

近 世

『資料編近世1』刊行に向けて、校正作業を続行中です。第九号でもご紹介しましたが、『資料編近世1』には黒田家の隠居・家督相続や家族の婚礼や出産に関する史料が掲載されます。これらの出来事は単に福岡藩内だけにとどまらない問題です。そこには必ず幕府や他大名家との関わりが出てきます。史料中では幕府とのやりとりや他大名からの贈答やその返礼、出産前後の各儀式の様子、担当の家臣たちの動きなど、時代劇や小説ではなかなか描かれることのない舞台裏を見てとることができます。現代でもそれぞれが大イベントですが、江戸時代の大名家の例のなかに、今にも繋がる部分が見えてくるかもしれません。

近 現 代

今号の特集で触れたような人が離れて閑散とした城下町の様子は、『維新雑誌』(福岡県立図書館蔵)からうかがえる同時代の証言です。明治六年の竹槍一揆では福岡城内の県庁が焼き討ちされ、さらに明治七年の佐賀の乱では福岡博多が戦場になるとの風聞もあつたよう(政府軍を統括する大久保利通の本営がありました)、城下の人離れに拍車が掛かったようです。

『資料編近現代1』は「維新見聞記」と題を立てて『維新雑誌』を収録することになり、現在校訂作業中です。一部に欠巻がありますが、福岡の幕末維新を知る重要資料といえます。平成二十四年刊行予定です。

民 俗

筥崎宮の玉取祭(玉せせり)で出発点となる玉取恵比須神社や、東公園の十日恵比須神社の大祭など、正月には何かと出番の多い恵比須様。七福神の一柱でもあり、商売繁盛の神という印象が強いのですが、鯛と釣り竿を手にした姿からわかるように、元は海と関係が深く、大漁祈願の神として漁師の信仰を集めました。市内では姪浜・今宿・伊崎・志賀島などの沿岸部で、筥崎宮の玉せせりとよく似た形式の祭りが正月に行われており、今も漁師の信仰篤いことがわかります。民俗専門部会でも可能な範囲で実地調査を行い、成果は平成二十四年刊行の『民俗編春夏秋冬・起居往来』に掲載される予定です。

平成 22 (2010) 年 8 月 31 日、吉田宏前福岡市長は定例記者会見のなかで『新修福岡市史』として、「資料編 中世 1 市内所在文書」と「特別編 福の民一暮らしのなかに技がある」の 2 巻を発刊したと発表しました。市長記者会見は毎週行われる性格のものですが、「市史」のような地味なものはあまり馴染みのないもので、一瞬場違いのような気もしましたが、しかし本来的に考えれば、現在の福岡市によってたつた過去の足跡をたどったものであり、記述内容は当然全市的にわたっているのです。市を代表する首長が先頭きって発表することはまことに妥当なことだったと思っています。

『新修福岡市史』は、福岡市制 70 周年を記念して昭和 36 (1961) 年から編纂が始められた、『福岡市史』(以下「旧市史」と称す)の後を引き継ぐもので、「旧市史」がその編纂時代範囲を、明治初年から昭和の末年までを対象とした行政史であることに対して、原始古代から、近現代までの福岡の歴史展開を、政治・経済・文化など多岐にわたって理解するために、全時代を対象として編纂するものです。したがって一定の準備期間のち、平成 16 年に市史編纂さん室を発足させ、編纂体制を整備させながら、編集委員による調査研究の後、今回の第 1 回配本にこぎつけたというのが現状です。特に今回の配本が「資料編 中世 1 市内所在文書」であったことは、福岡市の歴史を考えると、とりわけ意味のあることのように思われます。それは、中世の博多は全国的な対外交流の拠点であったことは定説化されながら、それを証明する史資料を一堂に集めたものは作られていなかったことによるものです。何回か編纂

された福岡県の自治体史でも中世資料の扱いは一部に限られ、今一步の感がありました。その意味でも福岡市史編さんの第一歩が、中世資料編で始まったのには大きな意義があると考えます。

しかし 6 年間の準備期間は相当永く感じられました。この間の社会状況の変化に対応しつつの編纂事業は、過去ほかの自治体史にも前例があるだけに大変気がかりなことでありました。編纂に携わっていただいている、研究者の方々のご労苦は多しなながらも、編さん室の心配ごとは常に存在していたのです。このように第 1 回目の配本が済んでみると、今後の課題は、これからの長年月の編纂計画を維持していくに足る予算の確保が考えられます。

このシリーズで報告してきたように、福岡市政の市史に対する思いは大正期に始まっています。歴代編纂主任の交代は多かつたし、さらに社会状況の急激な変動もあって、雌伏の状況を余儀なくされた期間が永かつたように思えます。直近の「旧市史」にしても編纂体制はありましたが、なかなか前進はしていませんでした。これが動き出したのは、市制 70 周年が目前になってからのことでした。

記録によると、昭和 31 年 5 月に発刊の方針が決定し、刊行されたのは同 34 年 3 月でした。資料収集、原稿作成、校正、印刷、製本などの工程を普通に考えると誠に驚異的としか思えない状況です。

次回で「旧市史」出版の経緯を見ていきましょう。

表紙の写真



天神交差点

【写真：新田岳 (cubicface)】

ときに「天神」は住所表記としてだけでなく、その周辺の繁華街を称して感覚的に使われることがあります。感覚的な「天神」の中心は人の流れでもあるため、百貨店などの建設・移転により変化します。ここ数年では岩田屋の移転や天神ロフトの開業、地下鉄七隈線の開通にともなう地下街の延長などにより、その流れは徐々に南下していました。しかし 2010 年春、6 年近く空き屋状態だった岩田屋旧本館跡地に、満を持して福岡パルコが開業。オープン時には早朝から数百人が長い列を作り、周辺の商業施設では各自「天神へようこそ」と歓迎のメッセージをのせた懸垂幕を掲げるなど、大きな盛り上がりを見せました。人の流れが再び北へ向いたことで回遊性が高まり、一層活気づいた「天神」はにぎやかに年末年始を迎えています。